

中 学 部

個別教育計画を重視した授業づくり

個別教育計画を重視した授業づくり－中学部－

－「生徒本人と行う目標確認・評価」と「評価法の検討」－

根岸由香 瀧山孝司 福島祥子 霜田浩信 岡田理恵
荒川憲洋 前川洋人 石津みどり 渡邊健治 氏森英亜

I. はじめに

1. 中学部個別教育計画の概要

－生徒本人と保護者の参加を視野に入れた個別教育計画－

1) 個別教育計画実施の必要性

本校中学部では「身につけてきた知識や技能をさらに深めるとともに、集団生活（行動）への参加、社会生活への参加」を目指している。そのためには、次の点に関して取り組んでいく必要があると思われる。

(1) 効率的な指導

小学部までの教育で身につけてきた知識や技能をさらに深めるためには、中学部での教育環境にスムーズに移行できること、そして、身につけてきた知識や技能を中学部の教育環境においても発揮することが必要である。そのためには、各生徒の教育目標ならびにそれへの手だてを中学部教師全員が共有し、効率的な指導をすることが大切になってくる。

(2) 社会参加への取り組み・保護者との協力

地域社会などで家族・学校以外の人とスムーズな関わり、行動できるための知識・技能・態度を養っていくためには、生徒の家庭や地域社会での生活の様子を教師が知る必要がある。そして、家庭や地域社会が生徒に対して何を望んでいるのかを知る必要があると考える。

また、学校教育で指導されたことが、家庭や地域社会の生活においても根付いていくことによって、より本人の生活が豊かになっていくと考えられる。

それらのためには、保護者の継続的な協力が必要になると思われる。

(3) 生徒本人の課題・目標理解

「自分の体や健康に関心を持つこと」「自分の役割を自覚し集団活動に積極的に参加すること」「自らの行動を決定し、自主的な活動すること」を目指していくには、生徒本人が自分の課題・目標を理解することを促す必要があるのではないかと考えられる。その課題・目標に関しての評価を自ら行っていくこと、分かりやすく返してあげることで、より課題・目標が生徒本人に明確なものとなっていくことが考えられる。

これらへの取り組みの一つとして個別教育計画実施の必要性があげられる。

2) 個別教育計画への本人の参加

個別教育計画実施にあたり、「個別教育計画から指導と評価までの過程」や「日程」「担当・関係者」「書式・方法」といった個別教育計画のシステムに関しては全校共通の物に準じているが、中学部では個別教育計画への本人の参加を志向して、次の点を考えた。

(1) 本人・家族の希望聴取の書式

表1に示したように希望聴取の書式の中に本人の記入できる欄を別に設け、記入できる生

徒にはそこに本人が希望を書くようにした。

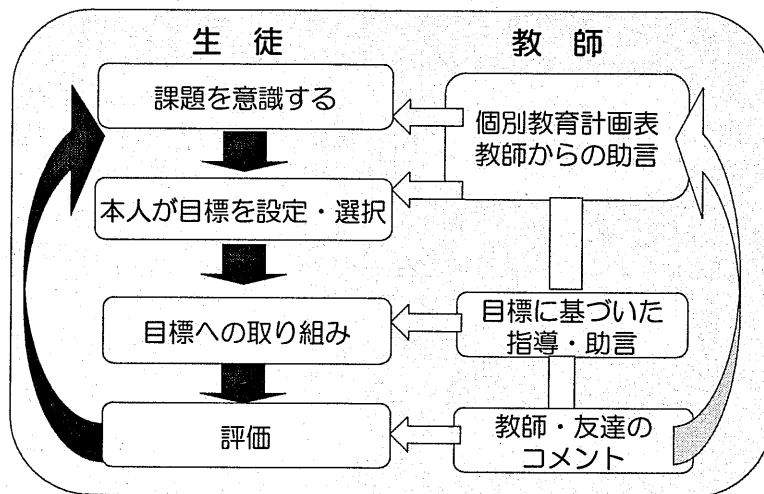
表1 本人・家族の希望

本人・家族の希望			
中学部	年	氏名	記入者
<div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 5px; display: inline-block; margin-bottom: 10px;">行動面</div> <hr style="border-top: 1px dashed black;"/> <p style="margin-top: 10px;">本人の希望</p>			

(2) 生徒本人と行う目標・評価の確認

年度当初や学期始めに、生徒に各自の課題や目標を考え、発表させる場を設けてきた。そのような取り組みを個別教育計画のスケジュールの中に組み込み、各学期のはじめには目標の確認を、各学期の終わりには評価の確認を生徒と共にを行うようにした（表2参照）。

表2 生徒本人と行う目標・評価の確認



本人に目標を自分で決めさせたり、確認をしていくこと、また、生徒本人と目標に対する評価を行っていく利点としては、次のようなことが考えられる。

生徒本人と行う目標確認の利点（仮説）

- 生徒本人が何に対してがんばったらよいか明確になる（生徒）
- 目標が明確になるので、その目標を達成しようと取り組める（生徒）
- 生徒の目標に向けての取り組みに対し、教師の指導・助言が明確になる（教師）

生徒本人と行う評価の利点（仮説）

- 自分が行ったことを振り返る機会となり、さらにながめることが明確になる（生徒）
- 友達や教師から誉められたり、励まされたりする機会になる（生徒・教師）

(3) 課題（昨年度の研究結果より）

個別教育計画を実施することの利点として、生活地図や希望調査書による情報の収集によって、生徒の家庭・地域活動の様子が一目で把握できるようになったり、家族や本人がどのような希望を持っているのかを、あらためて確認することができた。また、家庭や地域活動における課題や目標を学校教育と結びつけながら、具体的に考えやすくなった。さらに各生徒における目標や手だてが学部の教員間で、学校－家庭間で共通に理解することができた。特に、目標に対する手だてを共通確認する機会がより増えることになった。

本校の個別教育計画の特徴として、教育課程とは別のシステムとして考えている。これによりまず生徒における重点課題が目標となり、それに対する手だて・指導の場面が考えられた。しかしながら、各生徒の重点目標とされる個別教育計画の目標を、特に授業との関連の中で「どのような指導場面で」「どのような手だて」によって指導するのが妥当であるかについて具体的に検討するまでには至らず、今後の検討を必要とした。

また、生徒本人と行う目標・評価の確認に関しては、生徒本人と目標を確認していくことによって、何をがんばったらよいかのかが明確になり、その目標を達成しようと取り組むようになることが伺えた。しかし、あるひとつの場面だけでなく、他の授業、日常生活の中などさまざまな場面において目標を確認していくことで、目標の混乱が起きてしまった生徒がいた。目標そのものがその生徒において理解されていなかったことが伺えるが、設定・確認していく目標を精選していくことも今後の課題となった。

また、目標を発言したり、具体的に表現することが難しい生徒に対するアプローチに関しても今後の課題として残った。そのような生徒に対しては活動そのものを選択させることにより、それに取り組むことを目標としたり、目標としたことに対する評価を分かりやすく行ったりすることが必要であると考えられる。また、目標設定や評価の機会を設定していくことの有効性を、検討していく必要性があった。

さらに、個別教育計画運用の見直しのために、そして、現在の中学部の教育課程を見直していく資料とするために、個別教育計画の目標・手だてを盛り込んだ授業をどのように評価していくかが課題として挙げられた。

そこで、今年度の中学部の研究では次の点を課題とした。

- ①個別教育計画の目標・手だてをどのように授業の中に活かしていくか。
- ②生徒本人と行う目標の確認・評価の確認
 - 生徒に複数の目標設定によって、混乱させないためには。
 - 生徒本人による適切な目標設定と評価を促すためには。
 - 目標設定・評価の機会を設定していく有効性は。
- ③個別教育計画の目標・手だてを盛り込んだ授業をどのように評価していくか。

2. 中学部研究の目的

- 1) 個別教育計画を重視した授業づくりの手順を検討する。
- 2) 授業の中での生徒本人と行う目標設定・評価の手続きと有効性を検討する。
- 3) 授業づくりの評価表の有効性・妥当性を検討する。

Ⅱ 個別教育計画を重視した「リズム体育」授業づくりの手順

1. はじめに

「集団の一員として自覚とけじめのある活動ができる」など集団性や社会性の獲得が、中学部の教育目標であり、中学部段階の生徒にとって重要な課題である。従って、「生活単元学習」「体育」「音楽」「リズム体育」などの学部全体で行う授業では、その教科としての目標に加えて、集団性や社会性の獲得を目指した指導を行ってきた。

「リズム体育」の授業は、体育と音楽の合科的領域として設定され、週一回（1時間）ずつ、学部全体で実施している。生徒達は、音楽や踊りが大好きであり、「リズム体育」の時間を楽しみにしている。「リズム体育」の授業を進める中で、例えば、自分一人では自信がなく積極的に踊ることができない生徒が、友達と一緒に踊る中で積極的に楽しんで踊ることができるようになったり、友達と一緒にくり返し学習することにより、自信を持って踊ることができるなど、集団での学習による成果が上がっている。また、協調性や社会性も芽生えはじめている。従って、中学部段階の生徒達にとっては、学部全体で行う集団授業が、とても意義のあるものであると言える。

但し、授業の中での個々の様子を検討すると、まだまだ不十分な点が多く、個のニーズを視野に入れた展開が必要と考えた。従って、本研究においては、学部全体で行う授業の中に、個別教育計画をどのように取り入れ、どのように重視していけばよいかを工夫し、授業づくりを行ったことについて考察する。

2. 目的

- 1) 個別教育計画を重視した授業づくりの手順を考え、それに沿って実施する。
- 2) 授業の評価を行い、授業改善の視点とする。

3. 方法

次のように授業づくりの手順を作成し、それに沿って授業づくりを行う。

- 1) 個別教育計画の目標を指導する、指導場面の決定。
- 2) 指導計画の立案。
- 3) 授業の準備。

特に、授業の目的や学習活動に沿った個人の目標をたて、それに対して、教材・教具・学習環境・支援の方法などの手だてを考える。

- 4) 指導案の作成。
- 5) 授業の実施。
- 6) 授業の評価。

4. 結果および考察

- 1) 個別教育計画の目標を指導する指導場面の決定

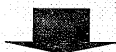
指導場面の決定にあたっては、まず、担任を中心に学部の教師で話し合い、個別教育計画の目標の指導場面を決定し、指導場面表を作成した。

2) 指導計画の立案

個別教育計画の目標等を考慮した指導計画

○個別教育計画からの目標にあげられた

「友達と一緒に」「友達に合わせる」が多い。



指導計画「⑥友達と一緒に楽しく踊ろう」が追加

○能力別の班分けではなく、課題別の班分けに

授業の担当者が指導場面表や個別教育計画表を基に、「リズム体育」の授業における指導目標を決定した。そして、「リズム体育」の授業において指導する目標と、個別教育計画の目標を、交互に見直しながら検討を行い、個々の目標を決定していった。

指導場面の決定をし、指導することになった個別教育計画の目標としては、「友達と一緒に」や「友達に合わせる」など、意欲・自主性・態度・関心や、集団性及び社会性に関する目標が多かった。従って、本来考えていた指導計画に「友達と一緒に楽しく踊ろう」を1時間追加して、本授業の指導計画を決定した。

指導計画

計11時間		計12時間	
①布を持って踊ろう	2時間	①布を持って踊ろう	2時間
②軽快なビートを感じて踊ろう	1時間	②軽快なビートを感じて踊ろう	1時間
③示範を模倣して踊ろう	3時間	③示範を模倣して踊ろう	3時間
④大きな動作で踊ろう	2時間	④大きな動作で踊ろう	2時間
⑤手具を持って表現しよう	2時間	⑤手具を使って表現しよう	2時間
⑥発表会	1時間	⑥友達と一緒に楽しく踊ろう	1時間
		⑦発表会	1時間

「リズム体育」の授業においては、教育課程上の目標として、「曲に合わせて決められた動きや、リズムやテンポに合わせた動きができる」や「示範を見て、模倣することができる」や「音楽を聴いて、自由に体を動かしてみようとする」等が挙げられている。

中学部生徒の実態としては、ほぼ全員の生徒が音楽に合わせて、自分なりに動くことができたり、示範を見て表象模倣ができる生徒が約半数の11名、部分的に模倣のできる生徒が5名、示範を見るのが困難で鏡模倣での対応が必要な生徒が4名、模倣は困難であるが音楽を聴いて自分なりに動くことができる生徒が1名であった。また、踊ることが大好きで楽しんで踊ることができるが、ひとつひとつの動作がとても小さかったり、アンバランスな動きを

する生徒が多いという特徴があった。そして、その原因として、生徒自身の中に、例えば自分の手はどこまで伸びて、どこまで届くかというようなボディイメージが確実に育っていないことや、ある程度の粗大運動は得意であるが、微細運動は苦手であること、例えば手を上に伸ばそうとした時に、どこの部分にどの様に力を入れて、どこの部分の力を抜けばいいのか、体感できていないことが考えられた。

従って、生徒達にボディイメージを持たせ、大きな動作で踊れるようになること、力のコントロールをしながら、柔軟な動きができるようになることを目的として、授業内容を考えた。

指導方法の決定にあたっては、指導目標の検討を細かく行うことにより、ひとりひとりの課題や、達成させるための手だてが明確となり、能力別ではなく、課題別に班分けをして、4つの班で指導することが適切だと判断し、変更した。

3) 授業の準備

①個人の目標 (指導案参照)
抽象的な目標でなく具体的な目標を設定
←個別教育計画の目標設定の方法

②生徒本人の目標 (指導案参照)
生徒が分かりやすい言葉で設定
普段使用している言葉で設定
←個別教育計画の目標と関連

- ①個人の目標については、「〇〇を意識して踊る」や「雰囲気を感じて踊る」や「踊りを楽しむ」などの抽象的な表現ではなく、なるべく具体的な文章で表せるように工夫をした。
- ②生徒本人の目標については、生徒たちに分かりやすい言葉で設定した。また、「〇〇先生を見て踊る」「かっこよく踊る」「とまらない」「意見をいう」「くしゃくしゃしない」などの、日常会話の言葉をそのまま使用し、設定した。
- ③手だての工夫として、個別教育計画の手だてを参考に設定した。

③手だての工夫 ← 個別教育計画の手だてを参考に

a) 手だて設定

- 具体的な手だてを
- 段階的な手だてを

例： i) 少し待ってみる ii) 言語による指示

 iii) 見本を示す iv) 手を添えて一緒に等

b) 音声・具体物・文字カード・写真などの提示

a) 手だての設定

手だてを、『具体的な手だて』『段階的な手だて』に留意して、設定した。例えば、「先生を見て鏡模倣をさせる」から「〇〇さん見て」と声をかけ、注目させてから見本を提示して模倣させる」「〇〇先生が生徒の目をひく衣装を着る」など、より具体的に工夫を行った。

手だての決定の際に、i) 少し待ってみる ii) 言語による指示 iii) 見本を示す iv) 手を添えて一緒に行う等の4段階に沿って、段階的な手だてを設定した。

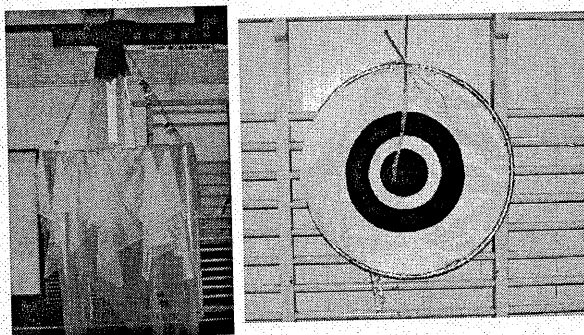
b) 生徒の能力に応じて、音声提示・具体物提示・文字カードによる提示・写真による提示を、それぞれ工夫した。

c) 生徒に分かりやすい提示のために、「指示で使用する言葉の決定」を行った。例えば、「集合、整列、がんばり表、布、バトン、波、フープ、班長、確認、評価」などである。

次に『学習環境の構造化』を行った。例えば（空間認知の難しい生徒や、多動な生徒に対して）・ビニールテープによる場所の指定、「〇〇さんの後ろ」という声かけに伴う見本提示、うでを伸ばす練習のための的の設置、リングを取り付けることによる回転場所の提示、等を工夫した。

**C) 生徒の分かりやすい指示ために
「指示で使用する言葉の決定」**

「学習環境の構造化」



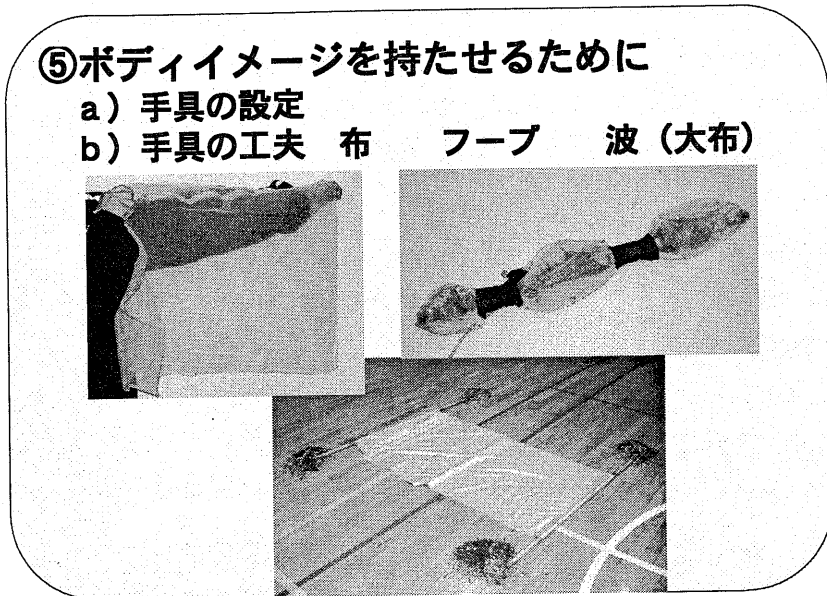
④教材の選定、について。

教材の選定にあたっては、生徒達の意欲を喚起し、家族とも話題の共有のできる「モーニング娘」の曲を選択した。

また、個別教育計画の目標として、意欲・自主性に関する目標が多く挙げられていたことより、生徒達が見通しを持って自主的に活動できるようにするために、あえてピアノなどを使用した生演奏で指導するのではなくCDを使用した。CDを使用することによる利点は、何度かけても同じ曲が、同じ状態で流れること、単一の楽器では表現しきれない音の広がり活用できることにあると考える。従って、これらが生徒達の意欲の喚起と、見通しをもった自主的な行動に結びつくと考えた。

⑤ボディイメージを持たせるために手具を持たせ、手や腕を意識させることにした。また、それぞれの生徒の目標に沿って、手具も大きく4種類（布・バトン・波・フープ）を準備し、その手具を個々の目標がより達成できるように考えて、工夫・改良を行った。例えば、布では、手指の巧緻性が高く器用に扱える生徒には、このままの状態で作させた。生徒の状況に応じて、持ちやすく活動自体を意識させるために、棒に固定するなどの工夫をした。

(フープの紹介) まず、持つべき手具を注視し、手を使うという目と手の協応を目的として、電飾を活用し、手具を意識させる工夫をした。



4) 指導案の作成について (指導案参照)

①実態・目標・手だての記述

「リズム体育」は、中学部全体で実施する集団授業のため、個人の実態・目標・手だてに加えて、課題別 グループの実態・目標・手だてが必要となる。従って、グループと個人の実態・目標・手だてを並列に記述し、実態表を作成した。また、関連する個別教育計画での目標も記載し、関連している目標と手だてには、下線を引いた。

(3) 生徒の実態及び目標・手だて

グループ			個人				関連する個別教育計画の目標		
実態	目標	手だて	生徒	実態	目標	手だて			
<p>布 音楽や踊りが大好きな生徒達の集団である。上手に踊る力はもっているが、全体学習の場でその力を発揮することが難しく、教師の支援が必要である。</p> <p>新しい教材に取り組みまでに時間がかかるが、良い点を誉められながら、くり返し学習することによって自信をつけ、積極的に活動することができる。</p> <p>友達に対する仲間意識が育っており、友達と一緒に活動する事を楽しめるグループでもある。</p>	<p>①ボディイメージをもちながら、大きな動作でダイナミックに踊る。</p> <p>②軽快なリズムを感じて踊る。</p> <p>③布を上手に扱えるようになる。</p> <p>④創作部分で、友達と一緒に動きを考え、合わせて踊る。</p>	<p>・手具(布)を持たせる。</p> <p>・音楽をよく聴かせる。</p> <p>・布をひらひらと振る練習をさせる。</p> <p>・友達の動きをよく見せる。</p>	1 3年 女	<p>動作模倣は良くできるが、好むテンポが速く、ゆっくり動くことが困難である。</p> <p>自分の役割は理解しているが、とても速いスピードで絡えてしまうことが多い。</p>	<p>・正確に模倣する。</p> <p>・落ちついて日直の役割を果たす。</p>	<p>・「MTを見て」と声をかける。</p> <p>・MTは大きく動いて示範する。</p> <p>・「1」と呼名をして注意をひきつけてから、日直であることを伝える。</p>	<p>・中学部全体での役割を自覚的に行う。</p>		
			2 3年 女	<p>活動に対して、とても意欲がある。熱心に踊るが、動作がアンバランスになりやすい。</p> <p>友達に注意が向くなど、踊りの途中で歌謡になることが多い。</p>	<p>・手足を大きく動かして踊る。</p> <p>・自信を持って最後まで踊る。</p>	<p>・「足も動かそう」と声をかけをし、更に「MTの足を見て」と指さし、示範をよく見せる。</p> <p>・踊りを確実に覚えさせる。</p> <p>・良い点を具体的に言語化して誉め、評価する。</p>		<p>・全体学習での注意の持続・発言</p>	
			3 3年 男	<p>本来、明るい性格で踊ることが好きであるが、全体学習の場では気後れし、一人で踊る事が困難である。消極的な動きになったり、参加するまでに時間を必要とする。</p> <p>教師と一緒に踊らないと意欲が減退し、途中で踊りをやめてしまうこともある。</p>	<p>・大きな動作で踊る。</p> <p>・最後まで踊り続ける。</p>	<p>・ST2が励まししながら一緒に踊り、踊りに対する意欲を高める。</p> <p>・「最後まで踊ろう」と声をかけながら、ST2が大きな動作で踊り、注意を持続させるように促す。</p>			<p>・体育の授業において、大きく体を動かす。</p> <p>・全体の活動に遅れまいとする意識をもつ。</p>
			4 2年 女	<p>活動に慣れるまで時間がかかる傾向にある。活動内容が理解でき、自信が持てると、大胆に行動することができ</p>	<p>・肘を伸ばして大きく踊れるようになる。</p>	<p>・MTが肘を伸ばして見本を見せ、「肘を伸ばそう」と声をかけながら踊る。</p>			

②展開の記述

学習活動と個人の目標が結びつけられるように、書式の工夫を行った。個人の目標が分かりやすいように、授業の流れに沿って4つのグループに分けて記述した。個別教育計画の目標と関連する目標には、実態表と同様に下線を引いた。また、本来手だてまで記載するのが理想的だが、手だてまで記載すると見難い指導案となるために、目標のみの記載にとどめた。

(4) 展開

※下線部分は個別教育計画と関連する目標である。

u003e

時間	学習活動	指導内容	留意点	目標（グループ及び個人）			
				布 MT・ST 2	バトン ST 1・5	フープ ST 3・4	波 ST 6
9:00	整列・挨拶 (配置図Ⅰ)	・学習の始まりを意識することができる。		1: 落ち着いた日直の役割を果たす。 (号令)		20: 自分から整列しようとする。 21: 整列時に集回から離れない。	
9:05	音楽に合わせて動く。 走る 歩く スキップ	・音楽が鳴ったら動く、止まったら止まることができる。	・曲に合わせて活動をさせ、音楽に合わせて踊ることへの意識を高める。 <u>MD操作・ST 4</u>				16: やるべき活動の内容が分かる。 18: 全体学習の場でみんなと一緒に行動できる。
9:10	ミッキーマウス バラバラを踊る。	・リズムによって身体を動かすことができる。 ・リーダーの動きを模倣することができる。	・楽しく踊り、身体を動かすことへの意識を高める。	1.5.6: 動きを正確に模倣する。 2.3.4.7.8: 大きな動作で踊る。	13: バラバラでリーダーの役をつとめる。 10: 示範を正確に模倣する。 3.13.14: 大きく力強く踊る。 9: 質問事項に対して積極的に発言する。	19: 手足をまっすぐ伸ばして踊る。	16: 手の上下の動きを模倣する。 17: 決められた動きを正確に模倣する。
9:15	ハッピーサマー ウェディングを踊る準備をする。 手具の準備 パートごとに集合 (配置図Ⅱ)	・これから何を踊るかが分かる。 ・手具の準備ができる。 ・自分のパートの場所に、集まることができる。	・前回までの活動を思い出させる。 ・自発的に準備及び集合をするのが難しい生徒に対しては、具体物提示や、教師と一緒に歩くなどの援助を行う。 <u>STは各配置につく</u>	6: 周囲の様子を見て動けるようになる。	14: 全体学習の場で指示がきけ、動けるようになる。		15: 自分の担当する大布が分かる取りに行く。 16: やるべき活動の内容が分かる。 18: 全体学習の場で、みんなと一緒に行動できる。
9:20	目標確認をする	・自分の目標が分かる。	・目標を達成しようとする意欲を促す。		10: 自分の目標を大きな声で言える。		
9:30	1回通して踊る	・前回までの踊りを思い出しながら踊ることができる。	<u>CD操作・ST 7</u>	3: 大きな動作で踊る。 7.8: リズムによって大	11: 踊りの輪の中にいる。 13: 力強く踊る。	19: 最後まで踊り続ける。	15: 最後まで動き続ける。 17: 決められた動きを正確に踊る。

5) 授業の実施

目標・手だてを綿密に設定して授業を行うことにより、MTの指導意図がSTに伝わりやすくなり、TT（チームティーチング）がより円滑に行えるようになった。

『がんばり表』を用いて、生徒本人に目標確認とシールでの評価をさせることにより、多くの生徒達が見通しを持って頑張れるようになった。

○目標・手だてを具体的に設定

↓
メインティーチャーの指導意図がサブティーチャーへ

○がんばり表を用いて
生徒本人と行う目標・評価の確認

6) 評価について

評価表を用いて評価を行うことで、目標の妥当性と生徒の変化が明確になった。また、教師間での、活動に対する指導法が確認し合え話し合いの材料になった。その結果、T T (ティームティーチング) が、更に円滑に行えるようになった。

**○評価表で評価：目標・手だての検討に
生徒の変化が明確に**

○教師間で、指導に関する話し合いの材料に

5. まとめ

個別教育計画を重視した授業づくりの手順を決定し、それに沿って実施したことによって、集団としての目標だけでなく、個のニーズも取り入れて授業を計画し、実践できるようになった。また、目標に対する手だてが明確になり、集団授業としてのまとまりや、T T (ティームティーチング) の円滑化にも役立った。

Ⅲ 授業の中での生徒本人と行う目標・評価の確認

1. はじめに

生徒本人と行う目標確認の利点として、「生徒本人が何に対して頑張ったらよいか明確になる。」、「生徒本人の目標が明確になるので、その目標を達成しようと取り組める。」、「生徒本人の目標に向けての取り組みに対し、教師の指導、助言が明確になる。」が考えられる。

生徒本人と行う評価の利点として、「自分が行ったことを振り返る機会となり、さらに頑張ることが明確になる。」、「友だちや教師から誉められたり、励まされたりする機会になる。」が考えられる。

しかし、これまでの生徒本人と行う目標・評価の確認の中で、さまざまな学習場面で目標を設定・確認していくことで、目標の混乱が起きてしまった生徒がいた。目標そのものがその生徒において理解されていなかったことが伺えるが、設定・確認していく目標を精選していくことが今後の課題となった。また、目標を発言したり、具体的に表現することが難しい生徒に対するアプローチに関しても今後の課題として残った。そのような生徒に対しては活動そのものを選択させることによって、それに取り組むことを目標としたり、目標としたことに対する評価を分かりやすく行ったりすることが必要であると考えられる。また、目標設定や評価の機会を設定していくことの有効性を検討していく必要性があった。

2. 目的

生徒本人と行う目標の確認・評価の確認を取り組んでいくなかで、次の点を目的とした。

- (1) 複数の目標設定によって、生徒が目標を混乱しない目標設定のあり方を検討する。
- (2) 生徒本人に適切な目標設定と評価を促していくための手続きを検討する。
- (3) 生徒本人と目標設定や評価を行う機会を設定していくことの有効性を検討する。

3. 方法

1) 対象とした授業

リズム体育「ハッピーサマーウェディング」 総時間数12時間

中学部生徒21名(布班・バトン班・波班・フープ班)

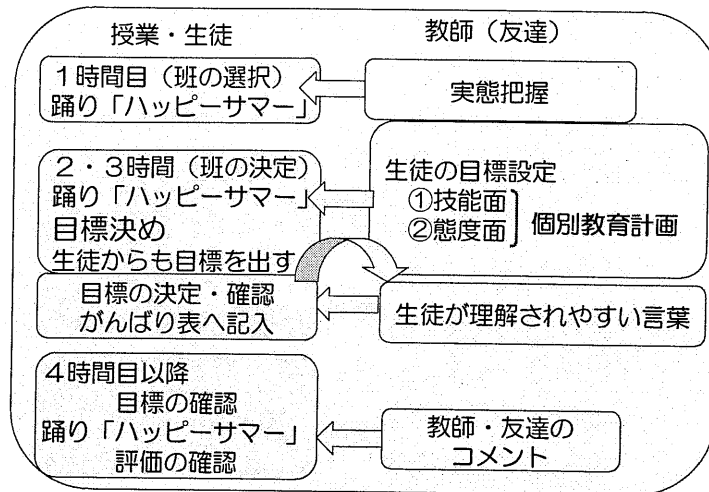
2) 生徒の目標設定までの流れ(表3-1参照)

リズム体育「ハッピーサマーウェディング」の1時間目で、これからどのような授業内容を行うかの導入を行い、今後どの班(布班・バトン班・波班・フープ班)を担当したいかを、生徒からの希望を聴取した。同時に、授業の目標を設定するための各生徒の実態把握を行った。教師は生徒からの希望する班と実態把握、そして、個別教育計画の目標を参考にして、態度面・技能面に関する授業における目標を設定した。目標を設定するにあたっては、リズム体育の授業担当者、担任の意見を参考にして、各班の担当者が設定した。

授業の2, 3時間目において、担当する班を決定するとともに、授業の目標の確認を行った。その際、生徒に対して「なにをがんばりたいか」と発言を促した。教師が設定していた目標と相違する場合、抽象的な表現(「格好良く踊る」など)の場合は、教師から具体的なポイント説明して、生徒本人と目標を確認した。確認では、教師が設定した目標を生徒がよく使う表現、生徒に理解されやすい表現などに置き換える工夫をした。また、生徒からの発

言がでない場合も、具体的な動きを説明するなどして目標を確認した。決定された目標は各生徒が持つ「がんばり表」に記入した。

表 3-1 生徒の目標設定までの流れ



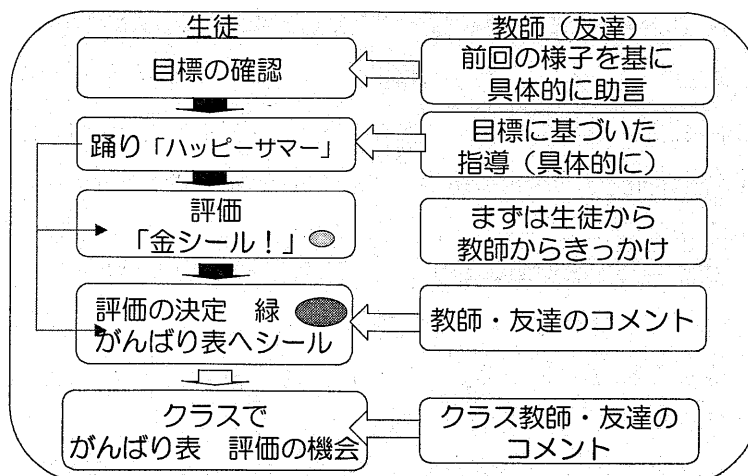
3) 授業における目標・評価の確認の流れ（表 3-2 参照）

各授業のはじめに、授業開始当初にあげたリズム体育における個人目標（技能面、態度面）について各班一人でひとり確認をした。前時までにどれだけ個人目標に到達したかを具体的にコメントし、本時ではどのような目標を設定し、行えばよいのか確認した。

実際に身体を動かすとき、教師は、目標をより簡潔にまた適切な言葉に置き換え、言葉かけを行った。1回目が踊り終わった後、かならず一人ひとりと会話をもち、目標に対する自分のパフォーマンスはどうであったかを確認した。

授業の最後に、まとめとして評価をする機会を設けた。生徒一人ひとりの発言や動作を大切にしながら評価を行った。目標達成に対して生徒本人がどのように努力したかを各班で話し合い、それぞれの友だちの良かったところや注意した方がよいところの意見交換も行った。あるいは、言葉ではなく、実際にみんなの前で動き、意識して行ったことを伝えた。その後、まず本人がシールを使い具体的な評価を行った（金：大変よくできた。緑：よくできた。黄：ふつう。赤：できない。）。最後に教師がその生徒の自己評価をグループのみんなと話し合いながら、最終評価を行い、シールを「がんばり表」に貼った。

表 3-2 各授業における目標・評価の確認の流れ



4. 結果および考察

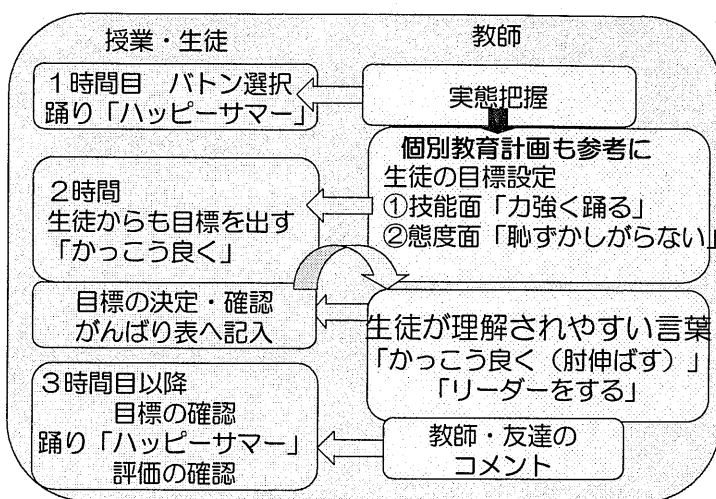
1) 事例 1

中学部 2 年女子。自分の目標を発言できる生徒であった。クラスのリーダー的存在であるが、時に恥ずかしがって、学習活動に取り組みなくなることがあった。個別教育計画には「友達をリードできるようになる」との目標が挙げられた。

(1) 本人の目標設定－事例 1－（表 3－3 参照）

1 時間目の授業において、本人の希望する踊りの班を聴取、実態把握を行い、それらと個別教育計画の目標を参考にして、①技能面「力強く踊る」、②態度面「恥ずかしがらない」という目標を設定した。2 時間目の授業において、対象生徒からの「格好良く踊る」という目標を参考にして、より具体的にな目標として①技能面「肘を伸ばして踊る」②態度面「パラパラでリーダーをする」を生徒と一緒に確認し、がんばり表に記入した。

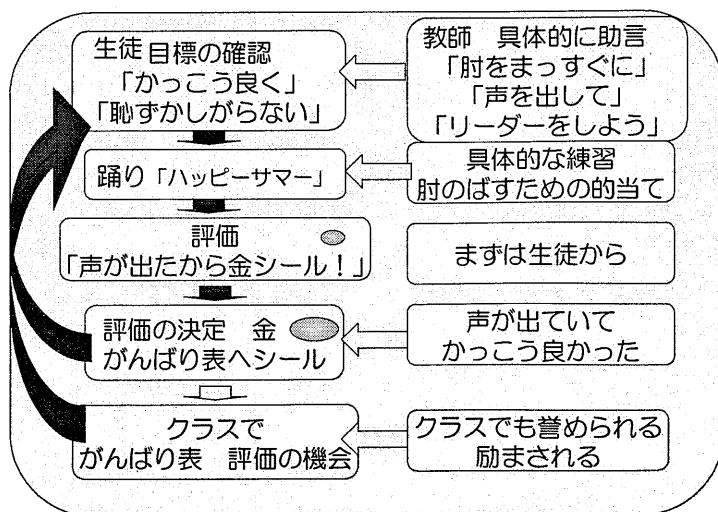
表 3-3 事例 1 における目標設定



(2) 目標確認・評価確認の様子－事例 1－（表 3－4 参照）

各授業において、個人目標に対して教師から具体的な助言と目標達成のための具体的な練習などが行われた。教師からの具体的な助言や練習をしていくなかで、対象生徒は「今日は、声を出して踊ったから金シール」と具体的な評価ができるようになった。また、評価確認の機会において、他の生徒に対するコメントも積極的・具体的に行えるようになった。

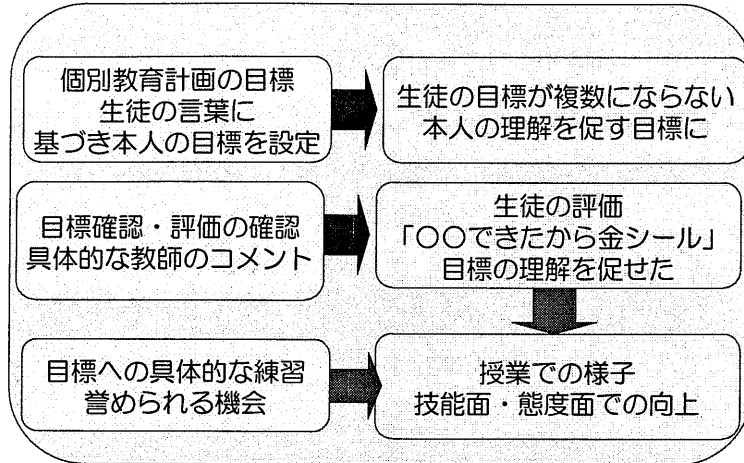
3-4 目標確認・評価確認の様子－事例 1－



(3) 事例1のまとめ (表3-5 参照)

生徒の目標が複数にならないためには、個別教育計画の目標に基づいて授業への目標を設定していくことの重要性が伺われた。また、本人にその目標を理解させるためには、生徒のことばを取り入れたり、具体的な目標に置き換えたり、目標に対する練習を設定し、具体的な助言を行っていくことの有効性が伺われた。そのような取り組みを通して、対象生徒は、授業の目標を達成していくことができた。

表3-5 事例1のまとめ



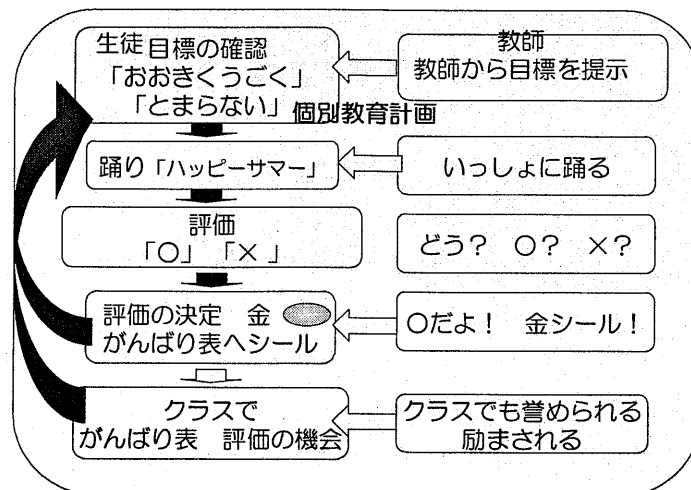
2) 事例2

中学部3年男子。学習場面では緊張することが多く、自分の目標を発言できないが、〇×で評価ができる生徒だった。個別教育計画には「大きく体を動かす」などの目標があった。

(1) 本人の目標設定と評価の確認—事例2— (表3-6 参照)

1時間目の授業において、本人の希望する踊りの班を聴取、実態把握を行い、それらと個別教育計画の目標を参考にして、①技能面「大きな動作で踊る」、②態度面「最後まで踊る」といった目標が設定された。2時間目の授業において、教師からより具体的な目標として①技能面「腕を伸ばして踊る」②態度面「止まらないで踊る」が生徒と一緒に確認され、がんばり表に記入した。各授業において、個人目標に対して、具体的な体の動かし方を教師と一緒に行うことで確認をしていった。評価の確認では目標に対して対象生徒が「〇」か「×」で答えることができるようにした。

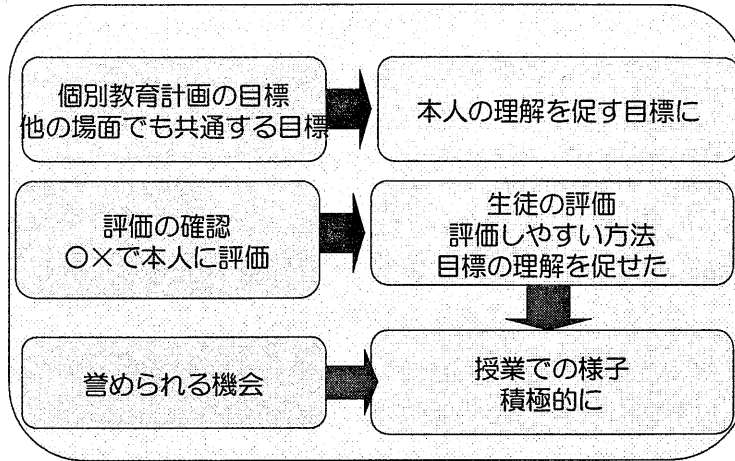
表3-6 事例2における目標設定と評価の確認



(2) 事例2のまとめ (表3-7 参照)

個人目標に対して、具体的な体の動かし方を教師と一緒にいたり、「○」か「×」で評価させるように評価方法を工夫することによって、対象生徒が目標に対して正しく評価できるようになってきた。各生徒に応じた評価方法の検討をしていく重要性が伺われた。

表3-7 事例2のまとめ



2) 事例3

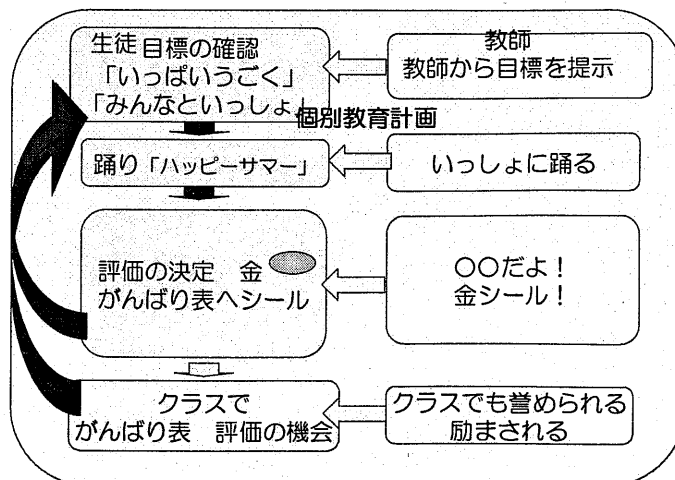
中学部1年男子。自分から目標を発言したり、○×などで自分で評価することが難しい生徒であった。個別教育計画には「仲間の動きにあわせる」「大きく体を動かす」の目標があった。

(1) 本人の目標設定と評価の確認-事例3-(表3-8 参照)

1時間目の授業において、実態把握を行い、それらと個別教育計画の目標を参考にして、担当する班、および目標として①技能面「たくさん体を動かす」、②態度面「自分から整列する」といった目標が設定された。2時間目の授業において、対象生徒と一緒に班の仲間にも理解されやすいように、教師からより具体的な目標として①技能面「いっぱい動く」②態度面「みんなといっしょ」が班の仲間と一緒に確認され、がんばり表に記入された。

各授業においては、個人目標に対して、具体的な体の動かし方を教師と一緒に行うことで確認をしていった。評価の確認では、教師から評価をシールとともに提示し、班の仲間とともに誉めたり、励ましたりした。

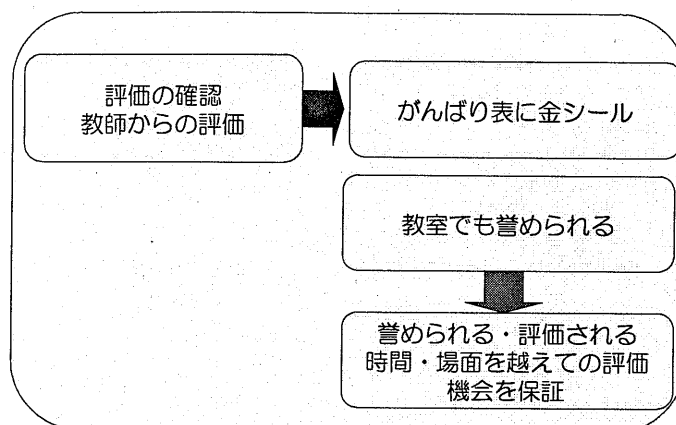
表3-8 事例3における目標設定と評価の確認



(2) 事例3のまとめ (表3-9 参照)

対象生徒は自分から目標を発言したり、評価していくことの難しい生徒であったが、評価と一緒に確認していく機会を設け、評価シールが貼られた「がんばり表」を教室に持ち帰ることによって、授業における評価だけでなく、時間と場面を越えて他者から評価される機会を保証することができた。また、対象生徒の目標を班の仲間に知らせることによって、教師からの評価だけでなく、仲間からの評価を受ける機会を保証できたと考えられる。

表3-9 事例3のまとめ



5. まとめ

1) 複数の目標設定によって、生徒が目標を混乱しない目標設定のあり方

より生徒に理解されやすい目標設定のために、そして、さまざまな学習での目標が混乱してしまわないためには、(1)個別教育計画の目標に基づいて、多くの場面に共通する目標を設定すること、(2)生徒のこばに基づいて本人の目標を設定することが重要であると考えられる。

2) 生徒本人に適切な目標設定と評価を促していくための手続き

生徒本人に適切な目標設定を促していくためには、教師からの具体的な助言や目標に対する具体的な学習活動が有効であると考えられた。また、生徒本人による評価を促していくには、こばによる評価のみでなく、各生徒に応じた評価方法を考えていく必要があることが確認された。

3) 生徒本人と目標設定や評価を行う機会を設定していくことの有効性

授業が展開されるにつれて、技能および態度の向上が見られた。授業開始当初は、厳しく評価を行ったり、逆に甘い評価を行ったりしていたが、授業が進むにつれ、まわりの友だちや教師と話し合いをもつことによって、友だちからの意見や教師からのアドバイスを聞き、それらを受け入れ、自分の良かったところ、悪かったところを適切に評価できるようになった。また、金シールが増えることを励みに授業に臨む生徒がいた。

自分から目標を発言したり、評価していくことの難しい生徒であっても、生徒本人と目標設定や評価を行う機会を設定していくことは、特に、「がんばり表」などに目標・評価を記入していくことによって、授業における評価だけでなく、時間と場面を越えて他者から評価される機会を保証することができたと考えられる。また、対象生徒の目標を班の仲間に知らせることによって、教師からの評価だけでなく、仲間からの評価を受ける機会を保証することもできた。

IV 評価表利用の利点と課題

1. はじめに

今年度の本学研究テーマは、個別教育計画を重視した授業づくりである。そのメインテーマに即し、中学部においては、「個別教育計画を重視した授業づくりの手順の検討」、「生徒本人との目標設定・自己評価の有効性の検討」、「授業づくりの評価表の有効性・妥当性の検討」を部としての研究テーマとして、年間の研究を進めてきた。授業づくりの手順を考えると、その手順の内容、その妥当性が問題になると考えられるが、それを問えるのが、ここで示す評価表の存在であるといえる。

授業づくりの視点として、実態把握と課題設定、指導計画と授業の展開、環境設定、教材・教具、教師の働きかけ、そして授業記録と評価があげられる。上記の視点を踏まえた評価表によって、授業終了後に評価をすることで、より個に応じた課題設定・教師の働きかけのさらなる工夫・個別教育計画の内容の具体化といった次時の授業づくりに向けたフィードバックが可能となり、このことが個別教育計画を重視した授業づくりといえる。そればかりでなく、この評価表の積み上げは、指導計画の見直しや教育課程改訂の一つの指針という学校単位で見たフィードバックにもつながる可能性を持つてゐる。

ここでは、授業づくりの手順にかかわって、その内容が検討された評価表を示し、その評価表利用によって、見えてきた利点と今後の課題について述べていくこととする。

2. 目的

研究授業を進めていく中で、評価表の中に、どのような項目を取り入れるか。生徒の活動の様子が分かり、次時の授業につなげていくには、どのような形式がよいか話が話されてきた。

この際に、課題とされた内容は、いかに個別教育計画の目標を指導案の中に取り入れていくかであった。その中で評価の観点を個に応じた、より具体的なものにすることで「個別教育計画を重視した授業づくり」という今年度研究のテーマが達成されるのではないかと考えた。この話し合いの過程で生徒個々人の課題が明確になり、次時の授業につながる評価表を作成していくこととなった。

評価表の利用を研究課題とするにあたって、以下の二つの目的を持って、研究に取り組むこととした。

その目的とは、

- 1) 今後の授業づくりの評価を確立するために、作成した評価表そのものの妥当性を検討すること。
- 2) 評価表を用いることによって生徒の目標・手立てが変化していくかを検討することである。

3. 方法

年間3回の研究授業を行った。授業案を作成すると同時に評価表を作成し、授業後、授業者、参観者がビデオを利用し、評価をした。

目的の1)に関しては、まず、評価表作成の過程として3回の研究授業時に改訂が行われ

た。その評価表の変遷を示し、評価表作成の視点とその課題、改訂のポイントについて検討した。さらに改訂後の評価表利用について、授業者による自評（A）と他者の評価（B・C）における一致点と不一致点の項目を挙げることで、評価表の妥当性と課題について明らかにすることとした。

目的の2)に関しては、評価表を利用することで生徒の目標・手だてが変化するかを、事例を挙げて検討することとした。

4. 結果および考察

1) 評価表の作成過程とその妥当性の検討について

1回目に行われた研究授業「林間学校」（生活単元学習）では、指導案の評価の観点として以下の項目（表1）が挙げられた。また、授業観察表（表2）が作成された。

授業観察表の評価は3段階で行った（○△×）。この観察表を使用するメリットは、授業を様々な視点から見るができる点にある。授業の目標、子どもと教師の関わり（特に教師の働きかけについて）、教材、教具や学習環境など授業を作っていく際、授業を参観する際の重要な視点が含まれている。この多元的な授業の視点とともに、生徒の個々に応じた目標や課題設定、ならびに手だてについての評価や個別教育計画を基にした評価を実施できる評価表を作成することが課題となった。

（表1） 題材名「班長の仕事」

①生徒の活動に関して

- ・自分の班カードを作成・発表できたか。
- ・日程表作りにおいて、各学習場面で活動できたか。
- ・各生徒の目標が達成できたか。

②授業準備に関して

- ・各生徒の目標は適切であったか。
- ・目標達成のための手だては、適切であったか。

(表2)

授 業 観 察 表

月 日 () 時間 ~

授業名

対 象

指導者 MT

ST

記録者

項 目	評 価	コ メ ン ト
授業目標と子どもの発達レベルの合致		
授業目標の明確性・具体性		
授業目標にあった授業活動		
授業活動の中身の精選		
子どもの取り組みやすい授業活動		
子どもの注意・意欲喚起の仕方		
説明や指示の仕方		
教師の口調・リズム・速度		
教師の身振りや表情の使用		
子ども全体の活動への参加のさせ方		
子どもへの援助の仕方		
子どもの統制の仕方		
個別の児童・生徒への配慮		
子どもの反応のとらえ方		
補助教師 (ST) の役割分担とその遂行		
学習時間の取り方		
使用した教材・教具の妥当性		
教材・教具の実際の使い方		
教材・教具の準備		
学習環境・場の設定		
総 合 評 価		

2回目の研究授業を前に、評価表を作成する際に、どのような視点で個々に応じた目標を設定するか議論された。その中で、2つの視点をもとに、目標が立てられることが提案された。その一つは、授業で身につけてほしい力である。この目標は、本時の目標からくる個人目標と個別教育計画からくる個人目標の2点から成る。(評価Ⅰ)はその2点の個人目標に対する評価表である。次に、個別教育計画の目標に関する評価表を作成した。(評価Ⅱ)個別教育計画からの目標を3つの観点(達成度、場面の適切性、手だての適切性)から評価し、次時への課題、コメントや個別教育計画への課題が記入できる欄を設けた。最後に、本授業の評価表である。(評価Ⅲ)これは、授業観察表(表3)を基にして、カテゴリー化するために、項目(目標、活動、手だて、TT、学習環境)を立てた。以下に2回目の研究授業、「調理」(職業・家庭)における上記評価表を付記する。それぞれの評価表の評価者はその授業のMTである。

(評価Ⅰ)

題材名「きのこバター炒めをつくろう」

生徒	個人目標	評価	コメント
A	見通しをもって、手早く次への活動ができる。		
	自分の仕事を確実に行う。		
B	レシピを見て、次の活動が分かる。		
	話をよく聞く。		
C	マイタケをちぎり、ホイルをたたむ。		
	自分から仕事を確実に行う。		
D	レシピを見て、次の活動が分かる。		
	発表場面で、積極的に発言する。		
E	まいたけをちぎることができる。		
	起立の号令で、自分で立ち上がろうとする。		
F	木べらを使って、混ぜ合わせることができる。		
	発表するときに、挙手ができる。		
G	調味料を決められた分量を入れる。		
	自分から確実に仕事をする。		

上段が本時からくる目標、下段が個別教育計画からくる目標

(評価Ⅱ)

題材名「秋野菜スープをつくろう」

個別教育計画との関連事項							
生徒	個別教育計画からの目標	個人目標達成度	場面の適切性	手だての適切性	次時の課題	個別教育計画へ課題	
A	班員とともに調理をする。						
B	与えられた仕事を責任持って行う。						
C	調理活動に積極的に参加する。						
D	仲間と協力して調理する。						
E	仲間と協力する。						
F	班の場所で調理活動に参加する。						
G	調理活動に積極的に参加する。						
H	リーダーとして班の活動の分担ができる。						

(評価Ⅲ)

	授業名：	授業日：	生徒：	授業者：
項目	評価内容		評価	コメント 次時への課題
目 標	1：本時の目標が達成できたか。			
	2：本時の目標は適切であったか。			
活 動	3：本時の目標にあった学習活動であったか。			
手 だ て	4：教材が適切であったか。			
	5：教材の提示方法は適切であったか。			
	6：教材の使い方は適切であったか。			
	7：教示方法は適切であったか。 (分かりやすさ、口調など)			
	8：子どもへの援助方法は適切であったか。			
	9：集団の統制は適切であったか。			
	10：子どもの反応のとらえ方は適切であったか。			
T T	11：教員間の役割分担とその連携は適切であったか。			
学 習 環 境	12：本時の時間配分は適切であったか。			
	13：場面の設定は適切であったか。			

この評価表の妥当性を検討するために、その授業のビデオを通して、他の教員が評価表を用いて評価をした。授業者の評価と他の教員の評価で一致する目標と不一致する目標を検討した。

評価Ⅰにおいて、一致する目標は「まいたけをちぎる」、「調味料を決められた分量入れる」といった達成すべき場面が特定されている目標である。そして、不一致する目標は「自分から確実に仕事を行う」、「話をよく聞く」という目標の記述が曖昧な点があげられた。この結果から、具体的な目標設定の必要性和学習活動と個人の目標を関連づけた授業づくりの重要性がとらえられた。

評価Ⅲにおいて、不一致した項目は、目標の本時の目標が達成できたか、手だての教材の提示・使い方などがあげられた。不一致の要因として、評価の場面など観点が異なることが考えられたが、一致、不一致よりも観点を揃えて、具体的に話を進めていくことの必要性和評価表にSTが記入する欄を設けてはどうかという意見が出された。

3回目の研究授業は、「リズム体育」の授業を行った。前回の課題を踏まえて、評価表作成を行った。それに加えて、評価Ⅰでは3段階評価(○△×)だったが、自己評価で4段階評価を使用しているのでそれとあわせて、4段階(◎○△×)で評価を行った。

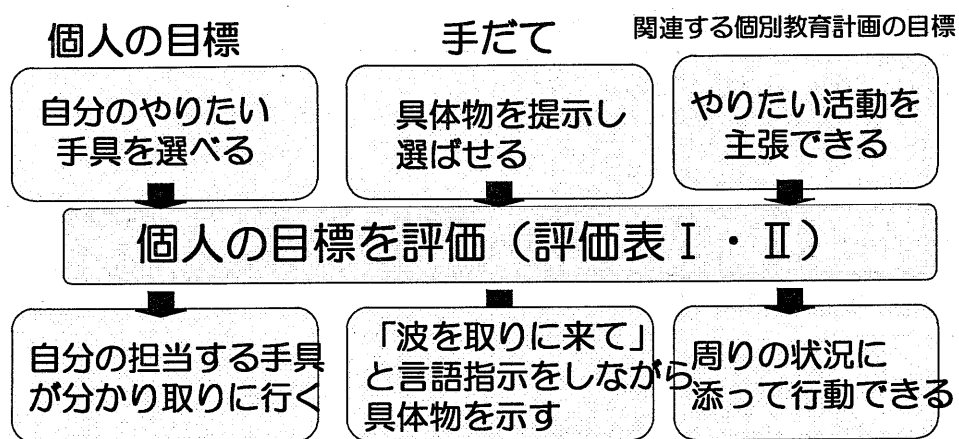
2) 評価表利用による生徒の目標・手立ての変化についての検討

3 回目の研究授業において、より生徒の目標達成や課題を把握するために、MT, STがそれぞれ評価表を使用して、評価を行った。

授業に関わる教員が評価をする際に、以下の(表3)のように生徒の目標や手だての変化が見られるようになった。設定した目標や課題が生徒に合致しているかどうかを日々の授業の中で確認していくことは、より生徒の意欲や達成感を高めるため、個のニーズに少しでも近づくため、必要なことであることが明らかにされた。

(表3)

事例：中3男子 波15



5. まとめ

1) 評価表の妥当性の検討

作成した評価表を利用することで、教員間において、生徒個々人の目標・手だて・個別教育計画からの目標を検討することができた。その中で、より具体的な目標設定の必要性、学習活動と個人の目標を関連づけた授業づくり、観点を揃えて具体的に話をMT, STともに進めていくことの必要性があることがわかった。

2) 評価表の有効性 (生徒の目標・手だての変化について)

評価表作成の過程で、「個別教育計画を重視した授業づくり」のために必要な評価表のあり方について、個別教育計画を以下に取り入れるかが議論され、今回の評価表が作成された。また、その利用に伴い、事例にも見られたように生徒の目標・手だての変化とその結果として自主性のある行動があらわれ、評価表の有効性が確認されたと考える。

今回の研究授業の中で、作成した評価表を検討していくこと、評価することで生徒の目標や手だてに変化が見られるかという二点において、話し合いが進められた。一定の成果が見られたもののすでに挙げられている今後の課題はもとより、数点にも別れた評価表については、日々の授業全てに使っていきけるかを含めて、その妥当性の検討は、継続してなされなければならないところである。今年度の材料をもとに、来年度はさらに個に応じた授業が展開できる評価のあり方、加えて、日々の実践への適応度といった観点での評価表の形式、評価をするにあたってのシステムについてさらなる研究が課題といえる。

IV まとめ

1. 個別教育計画を重視した授業づくり

検討された個別教育計画を重視した授業づくりによって、さまざまな指導場面において、より具体的・適切で、共通性を持った目標・手だてを考えていくことが可能になったと思われる。特に手だてに関しては、「参加」を促していくための教育支援として教師からの教示や身体的な援助だけでなく、教育環境としての手だてを考えることが出来た。

また、目標に対する手だてが明確になり、集団授業としてのまとまりや、TT（チームティーチング）の円滑化にも役立った。

2. 授業の中での生徒本人と行う目標・評価の確認

重点目標としての個別教育計画の目標を基に、授業の中で生徒本人と目標・評価を確認していくことによって、自分の目標を意識しながら授業に臨むことができ、それにより、授業での技能・態度面の向上がみられたと考えられた。生徒本人が評価をする方法に関しては、生徒に応じた工夫が取られたが、今後更なる検討は必要であると思われる。

これらの取り組みは教師とのやりとりだけでなく、周りの仲間に対しても一人ひとりの目標を確認する機会になった。これによって、周りの仲間も友達一人ひとりの目標に対する取り組みを評価することができた。今後、集団としての仲間意識に対する効果も期待できた。

また自分から目標を発言したり、評価していくことの難しい生徒であっても、生徒本人と目標設定や評価を行う機会を設定していくことは、特に、「がんばり表」などに目標・評価を記入していくことによって、授業における評価だけでなく、時間と場面を越えて他者から評価される機会を保證することができたと考えられた。

3. 授業づくりの評価表の有効性・妥当性

評価表を用いていくことで、生徒の目標・手だてがより具体的・適切になっていくことが示され、作成された評価表の有効性・妥当性が伺われたが、この評価表を日々の授業で使用していくには、評価項目が多く、今後、評価法の簡便化が必要となった。